

授業と図書館の協働

— 初年次教育科目における連携を中心に —

Collaboration Activities by Faculty and Library in the First-year Experience

橋本 信子*

Nobuko Hashimoto

大学では受け身の学びから自ら問いを立て探究する学びへと転換することが求められる。そのためには学生の興味関心を喚起し、信頼性の高い情報を批判的に読み解く学習経験の機会を創出することが肝要である。特に初年次において図書館の空間を使用して所蔵資料を使った授業を行うことが効果的である。その際には図書館職員との協働が有効かつ不可欠である。

キーワード：図書館、教職協働、初年次教育、アクティブ・ラーニング

はじめに

本稿は大学の授業、特に初年次教育科目において図書館を活用する意義について考察し、教職協働による授業実践の成果と課題について報告する。

大学図書館といえば、ここ数年はラーニング・コモンズ¹⁾の開設と利用状況に関する論稿や報告が花盛りである。2012年の文部科学省中央教育審議会の答申²⁾および教育振興基本計画(2013年6月閣議決定)は、大学教育においてはアクティブ・ラーニング³⁾への転換が必要としたい、そうした学生の主体的な学習のベースとなる図書館の機能を強化する場としてラーニング・コモンズの設置を推進することを推奨した。これを受けて各地でラーニング・コモンズが開設されている。そのような時勢に、あえてなぜ「図書館で授業をする」ことにこだわるのか。

空間の整備が確かに学生の自主的な学習を促す環境を整えるという点で有効な方策の一つであることは筆者も肯定する⁴⁾。が、岡田(2014)が言うように、ラーニング・コモンズや「壁一面がホワイトボードになっている部屋」(アクティブ・ラーニングの促進を狙って改装される部屋に多い仕様)を設置しても、便利な什器やデジタル機器を設置しても、それだけで学生の主体的な学びが自動的に生まれるものではない。その場所を使ってどのように学ぶのか、学生が主体的に学ぶには教職員は何ができるのか、どうすればいいのかを考えなければならない⁵⁾。

そしてもう一点、あらためて考えたい。なぜ「図書館に」ラーニング・コモンズを設置するこ

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

とが求められているのか。なぜならば、電子媒体による情報を学術研究に用いる割合は年々増加しているとはいっても、図書館が蓄積してきた多様で大量の紙媒体その他の資料が不要になるわけではなく、図書館にはそれらの資料と、その活用方法に通じる情報のプロである図書館職員が存在するからである。

教育振興基本計画には「効果的なアクティブ・ラーニングを実現するため、大学内で、図書館、情報系センター、教材開発センターなどの関連組織の連携、さらに教育を担当する教員が協力して推進する体制を構築することが重要」という文言も記されている。むしろこちらの方が大切なのではないだろうか。

以下、第1章では、授業と図書館が連携する意義を大学生の学習経験の実態から再確認する。第2章では筆者が図書館と協働して行ってきた教育実践を報告する。第3章では実践から得た知見と反省を踏まえ、今後の課題について述べる。なお本稿で報告する教育実践の対象は主に社会科学系の学部所属する初年次の学生であるが、授業内容と方法は幅広い分野と学年に適用可能である。

I. 授業と図書館の連携の意義

1. 大学生の学習経験の実態

大学では、与えられた問題を解く受け身の学びから、自ら問いを立て、探究する学びへと転換することが求められる。そのためには学生の知的な興味を引き出し、育てるという要素が不可欠である。そして、その興味に関連する情報を多様な資料から集め、それらを批判的に読み解き、思考を経て再構築することが必要となる⁶⁾。大学入学直後の段階では、まず自分が何に興味関心があるのか、大学ではどのようなことを学べるのかがわかっていなかったり、高校までの知識や経験だけでものごとを判断したりする学生も多い。特に社会科学系学部の場合、学部での学びが必ずしも職業に直結するわけではないので、これから何を学ぶのか、学べばどのような道が開けてくるのかが学生にはわかりづらい。が、それは逆に、多様な可能性が広がっているということでもある。そこで、まずは学問分野の幅の広さを知って視野を広げたくて、自分の興味関心を自覚し、それらを学問的に探究していく姿勢を引き出すことが求められる⁷⁾。

その前提として、学生たちが入学までにどのような学習経験をしてきているか見ておきたい。まず大学入学までに彼らがどれくらい本に親しんできたかを見てみよう。毎日新聞の「学校読書調査」によれば、2013年5月（2015年度新生が高校2年生であった時期）の高校生の1か月の平均読書量は1.7冊であった。「1冊も本を読まなかった」生徒の割合は45%である⁸⁾。一方、毎日新聞社の「読書世論調査」では、満16歳以上の男女計3600人のうち、普段書籍を「読む」と答えた人は54%で、「読まない」は43%である。平均読書冊数は月に1.9冊で、普段本を「読む」と答えた人に限れば平均冊数は3.8冊である⁹⁾。さらに細かく見ると、20代は本を「読む」人の

割合が全年代でもっとも高い 65%であるが、高校から大学生前半に当たる 10 代後半は本を「読む」と答えた人が 47%、「読まない」が 48%である。読書量は小、中、高校生と年齢が上がっていくにつれ、大幅に下がっていき¹⁰⁾、高校から大学にかけての年代は読書習慣がもっとも低調になるのである。

筆者が所属する流通科学大学の 1 年生に高校時代の学習経験について調査を行ったところ (2015 年 6 月実施、有効回答数 728)、マンガ・雑誌を除く読書の頻度については、「週 1 冊以上」が 41 人 (5.6%)、「月に 2, 3 冊以上」49 人 (6.7%)、「月に 1 冊くらい」が 107 人 (14.7%)、「年に数冊」が 260 人 (35.7%)、「まったく読まない」が 268 人 (36.8%)、不明 3 人であった。やはり明らかに高校時代に読書の習慣がなかった学生の割合が高い。ただ「本 (マンガ・雑誌を除く) を読むのが好きか」という質問に対しては、「非常に好き」が 61 人 (8.4%)、「好き」336 人 (46.3%) を合わせると 397 人 (54.8%) で、「嫌い」273 人 (37.7%)、「非常に嫌い」55 人 (7.6%) の合計 328 人 (45.2%) を上回ってはいるので、きっかけや仕掛けをつくれれば読書の習慣が改善する余地はあるように思える。

次に、授業などで図書館や図書室を利用し、必要な情報を調べた経験はあるか尋ねたところ、「経験がある」と回答した学生は 243 人 (33.4%)、「経験がない」と答えた学生が 482 人 (66.2%) であった¹¹⁾。インターネットを利用し、必要な情報を調べた経験については、「ある」と答えた学生が 434 人 (59.6%) で、「ない」と答えた学生 292 人 (40.1%) を上回った。インターネットで調べた「必要な情報」のなかには「学習経験」とは言えないものも含まれている可能性はあるものの、調べる手段はいまや図書館よりもインターネットとなっていることを示す数字である。インターネットで調べものをする事自体は今では小学校でも普通に行われているので驚くことではないが、このような学生たちが何の手ほどきもなく大学で求められるレベルで調査や研究ができるようになるとは考えにくい。そもそも調べものに図書館を利用するという発想がないのではないだろうか。

「調べたことを人前で発表した経験がある」と答えた学生は 350 人 (48.1%)、「経験がない」と答えた学生は 375 人 (51.5%) であることも無視できない。小中高校の学習指導要領においては、基礎的・基本的な知識、技能の習得に加えて、課題解決力、主体的に学習に取り組む意欲と習慣を身につけること、特に言語活動に力を入れるべきであると明示されている¹²⁾。それにもかかわらず、そうした学び方の土台になるような経験をしてきていない学生が過半を占めているのである。このような現実を踏まえれば、資料を探し、読み、まとめて、人に伝えるという学習方法を入学後早いうちに経験する機会を設けることから始めなければならないことは明らかであろう。

2. 図書館を活用することの意義

そもそも多くの大学生は、世の中に多種多様な資料が存在すること自体を知らない。図書館ガイダンスを行うと多くの学生が高校の図書室との違いに驚き、空間的な広さ、資料の多さに圧倒されたという感想を記す。図書館に並ぶ大量の単行本、雑誌・新聞・官報などの定期刊行物、事典・辞典・白書・統計等の参考図書は、一部はデジタル化が進んでいるが、印刷物の形でしか見ることができない資料もまだまだ多い。それらをぶらぶらと見て回ること（ブラウジング）で、自分が惹かれる分野を意識する経験は早いうちに体験しておくべきである。それも一度きりでは十分でない。図書館に何度も足を運び、活用する機会をつくる必要があるのだ¹³⁾。そして三上(2010)が言うように、「課題をやるときはもちろんのこと、それ以外にも、就職活動や今後の人生を考える上でも、また、自分がやっている部活やスポーツ、趣味のことに関する本や情報もたくさんあるのだ、利用できるのだ、ということに気づいてくれば¹⁴⁾」学生の可能性は広がり、生活が豊かなものになるだろう。

図書館の資料を活用する習慣をつけるには、授業で図書館を活用する課題を出すことが効果的である。まずは図書館を一巡し、検索の方法をなぞることを一度は体験すべきだが、必要性を感じることでできる状況で資料を探索することをくりかえすことで情報探索の能力や勘が磨かれるのである¹⁵⁾。

図書館の資料を使うことにこだわるのは授業実践の経験からである。いわゆる難関校の3, 4年生でも、インターネットの使用を特に制限せずに調べものをさせると、多くの学生がGoogleで検索して上位に来るページを切り貼りした課題を出す。独自の視点で提示されたテーマについて掘り下げたり、視野を広げて論を展開させたりしなくなるのである。同じ学生たちでも、印刷物になった資料（学術論文の場合はインターネットからダウンロードしたものも許可している）を使うことを条件づけると、調べてくる事項が多様なものになり、学生の独自性が明確に現れてくる。教員も知らない事実や文献を見つけたり、思いつかないような発想で調べたりするのである¹⁶⁾。彼らに図書館の参考図書コーナーで統計本や白書を見てみることを促し、CiNiiで学術雑誌記事を見つける方法を図書館のHPを投影して示したところ、学生たちは画面を食い入るように見てメモをとっていた。つまり3, 4年生でもそうした資料の存在を知らない学生が少なからずいるのである。

学生だけではない。今や教員にとっても「図書館が研究に不可欠な存在から電子的な情報サービスの影に隠れた見えない存在になりつつ」ある¹⁷⁾。電子ジャーナルやインターネット、図書館相互利用サービスなどによって、自宅や研究室のパソコンから直接あるいは取り寄せて労せず資料を得られるようになり、教員も図書館に足を運ぶことが減っている。しかしそれでは自分の専門分野以外に疎くなる恐れがある。筆者自身、前任校に勤め始めたときに勤務先の図書館を見て回って、特に雑誌の開架書架になじみのない分野の専門誌が多数並んでいるのを見て、新鮮な驚

きと知的な興奮を覚えた。

図書館で授業を行うと、学生が棚をめぐる様子を観察したり、学生が調べたことを聞いたりするたびに教職員も新しい発見を得られる。学生の興味関心やニーズを直接知ることができる。所属する大学の蔵書の多寡や偏りを意識するようになる。このようなメリットと一緒に授業をつくった図書館職員や補助に入っていたいただいたゲスト講師からも聞くことができた¹⁸⁾。そうした気づきの共有が教育研究の改善に資することはまちがいない。次章ではこうしたメリットを得られる授業実践を報告する。

II. 図書館を使った授業実践と連携企画

1. 2011年～14年度 大阪商業大学での実践

前任校の大阪商業大学では、授業と学修支援センターと図書館が連携し、さまざまな企画を実施している¹⁹⁾。初年次教育は全学共通で進められており、4月には1年生全員を対象に図書館ガイダンスと検索実習を実施している。図書館と学修支援センターが協議してその運営に当たっている。ガイダンスは、2010年度まではゼミごとに、2011年度からは1年生の演習科目「基礎演習I」（2014年度からは「ゼミナールIA」に改称）の授業内で行っている。「基礎演習I」（全26クラス、1クラス36～52名程度）は月曜から金曜までの1限目に5～6クラスずつ配置されているので、4月中旬の一週間をかけて各曜日200～250名程度ずつ受講する。各曜日の5～6クラスは、さらに2グループに分けて、1コマ（90分）のなかでホールでの講習と図書館見学ツアーを交代で受ける。説明は図書館職員が行うが、見学ツアーでは随行する演習担当教員が館内を回りながら独自に説明を加えたり、助言を与えたりする場面もしばしば見られる。

資料検索の実習は、2011年度は図書館内で授業外に実施した。学生に受講の希望日を提出させ、学修支援センターが日程を調整した。その作業の負担があまりに大きいため、2012年度からは図書館ガイダンスの時に課題用紙を配布し、各自でOPACを使って書籍を検索し、後日、担当教員に用紙を提出する方法に変更された。センターと図書館職員の業務量を考えるとやむをえない変更であったと思うが、図書館職員へのヒアリングによれば、少人数で検索実習を実施した2011年度入学生はその後の図書館利用が多いという。ただし、それが実習の効果によるものかどうかは確認できていない。全学で共通して取り組む図書館関係の授業は以上である。

2013～14年度には図書館員と筆者が協働して、おすすめの本、新聞記事、参考図書、雑誌記事、データベース記事を紹介する授業を開発し、複数の教員と複数の科目で実践した。対象とした授業は初年次演習、2年以上向けアカデミック・スキル科目、キャリア教育科目である。詳細は教育実践論文として報告しているので参照されたい²⁰⁾。

2014年度には、13年度の実践に加え、図書館主催の新規企画とも連携することができた。「みんなの書評」展示、データベース講習会、「プチエッセイ大賞」の3企画である。前期末に開催さ

れた「みんなの書評」展示企画は、お気に入りの書籍を紹介するPOP様の作品を図書館利用者から募集し、展示するものである。ちょうど演習科目で「おすすめの一冊」や「おすすめの参考図書」を紹介するプログラムを終えた直後だったので、その学習成果を作品にして応募することを授業内で課した。同じ科目を担当する複数の教員にも呼びかけたところ、合わせて100点強を提供することができた。図書館が主体となって利用者に作品を募る形での展示企画は初めての試みであったそうだが、十分な点数の応募があったこと、利用者の反応も良かったことから、教員を巻き込んだ利用者参加型企画を積極的に進める機運が高まったと聞いている。

同じ職員による発案で、後期には「プチエッセイ大賞」が企画された。この企画においては、図書館を授業で利用することの多い教員複数名が構想段階から検討作業に協力した。応募総数は76点に達し、そのうち40~50点が複数の教員の授業内での呼びかけによるものであった。図書館利用者による投票による賞と、図書館長、図書館員の選考による各賞が発表され、表彰式も行われた²¹⁾。入賞作は翌年度の新生が閲覧できるよう、2015年4月まで展示された。

データベース講習会は別の図書館員の発案である。3つのデータベース（ジャパンナレッジ、日経テレコム、日経BP）の運営会社から講師を招いて開催した。図書館の担当者と筆者で、実施する科目、日程、講習内容等を詳細に打ち合わせた。単なる操作説明会に終わらないよう、「プチエッセイ大賞」とも連携させ、エッセイの素材をデータベースで探すことを主眼にしたオリジナルの内容にしてもらった。概要が決まった時点で、ほかの教員にも呼びかけ、4教員が担当する3科目6クラスの授業内で講習を実施した。開講曜限が同じ科目は合同授業にし、計50名の参加があった。同じ日に図書館主催で2回の講習会が開催された。こちらには任意で学生・教職員計12名が参加した。外部講師によれば、3社が合同で同じ時間内に講習を開催することは稀とのことで、他社の講習を見る貴重な機会になった、参加者が多くてやりがいがあったとの感想をいただいた。以上3つの企画に関わった教職員、受講した学生の反応はいずれも上々であった。

後日行った図書館へのヒアリングでは、これらの企画によって図書館職員のスキルと意欲、連携の意識が向上したこと、展示企画では地域の一般利用者が熱心に見ていたことから地域への教育活動の発信として有効だと判断したこと、今後も同様の体験会や講習会、参加型展示企画を継続して実施することを決定したとの回答を得られた²²⁾。教職協働に関しては、教員に向けて図書館で（が）できることを提案として積極的に発信していくこと、企画に際しては一斉の広報に加えて、連携ができそうな教員に個別に呼びかけていくことが有効だと考えているとの所見を得た。

2. 2015年度前期 流通科学大学における実践

本項では、流通科学大学（以下、本学）での実践を報告する。本学図書館は開学以来、建て替えや改装を行っておらず、2015年9月2日現在、グループ学習室やラーニング・commonsのような空間はない。授業で図書館を利用する際には、隣接する教室や廊下を取り込んで増設された「業

界リサーチルーム」を利用する。図書館は書籍、雑誌、新聞等、従来の活字資料を中心に所蔵し、PC や DVD などの映像資料視聴は別棟のメディアセンターが収蔵、管理している²³⁾。

a. 2014 年度以前の図書館と授業の連携および主な図書館自主企画

2014 年度、本学図書館は、1 年生の演習科目「基礎演習」全 51 クラスを対象に「ライブラリー & メディアセンターツアー」を実施している。1 コマ (90 分) のなかで図書館・メディアセンターを紹介し、図書館で本を探す演習である。図書館独自の企画として、より実践的な図書館活用講座も実施されている。こちらにはゼミとの連携により 37 教員 60 クラス、学生約 700 名が参加した。さらに就職対策としてゼミとの連携で開催した日経テレコン講習会には、19 ゼミ、学生約 150 名が参加している。

毎年秋には「書評コンテスト」が開催されている。2008 年以前は年 2 回、2009 年以降は年 1 回の開催である。2010 年までは 50 点程度、11 年以降は 100 点前後の応募があった。コンテストの結果は図書館入り口付近に掲示される。また、英語多読授業との連携も行われている²⁴⁾。入館してすぐの目立つ場所には多読授業の受講生が作成した POP が展示してある。筆者は「書評コンテスト」の結果や多読授業での POP 作品の掲示を見て、担当する科目「文章表現Ⅱ」での「書評コンテスト」全員応募と、作成した書評をもとにした POP 作成を授業に盛り込むことを思いついた。その実践は次項で述べる。

授業外の企画としては学生有志による「選書ツアー」も行われている²⁵⁾。選んだ本のうち一冊以上の POP を書くことが参加の条件である。所蔵の手続きが終われば選書した学生に優先的に貸し出しされる特典がある。選書は図書館入り口近くの「学生選書コーナー」に POP と共に配架される。自分が選んだ本が配架されるのを見るのは、他の棚を見るのとはまた違う楽しみがある。後述する図書館ガイダンスではこのコーナーの本から一冊を選んで書誌情報を書く課題があったのだが、学生の反応がたいへん良く、そのまま借りて帰る学生が何人もいた。学生は同じ年代の学生が薦める本に強い関心を持つ。前任校でも学生選書コーナーが一番の人気だと聞いた。「おすすめの 1 冊」書評作成のときにもクラスメイトの薦める本を読みたいという感想は毎年多く寄せられる。こうしたコーナーの設置は読書の促進に効果的であるのだ。

筆者も 2015 年春の選書ツアーに参加し、学生と互いの「釣果」を評し合うという機会をもった。楽しく、また貴重な知的交流の機会を得たことで、どのような学生が選書ツアーに参加するのか、どういった本を選ぶのかを直接見ることで、6、7 月の授業計画に良い示唆を得ることができた。多くの大学図書館で学生による選書ツアーが行われているが、教員に参加を呼びかけると授業改善の一環となるのではないだろうか。

b. 図書館での授業実施科目「文章表現Ⅱ」の概要

さて、2015年度は初年次教育のカリキュラムの大幅改訂と図書館担当の専任職員の人員減が重なり、前期に1年生向けの図書館ガイダンスが実施できなくなる幕開けであった。そこで、初年次教育担当教員として着任した筆者と桑原桃音商学部講師が、6、7月に担当する「文章表現Ⅱ」で図書館を使った授業を実施することにした。

本学の初年次生は2015年度より、前期の間は1年生だけで授業を受けている。前期はクォーター制になっており、4～5月の第1クォーターでは「自己発見とキャリア開発」という週8コマ8単位の必修科目を中心として、全員がほぼ一律に同じ科目を履修する。6～7月の第2クォーターは、「基礎技能」「教養基礎」といった科目から学生自身が選択して受講する。第2クォーターの授業はいずれも2コマ連続で、8週間で16コマを受講する。

図書館との連携授業を実施した「文章表現Ⅱ」は第2クォーターの「基礎技能」という科目群の一つである。第2クォーター科目はいずれも必修科目ではないが、「文章表現Ⅰ」と「数的処理」、各学科への誘い科目の受講は全員が履修することを強く推奨された。「文章表現Ⅱ」はそのあとに選ぶ科目となる。つまりほぼ全員が「文章表現Ⅰ」に加えて登録する科目である。そこで、「文章表現Ⅰ」の応用編、実践編という位置づけにした。

「文章表現Ⅱ」の到達目標は「信頼できる資料を使って根拠に基づく意見文を書けるようになる」こととした。1クラス40名定員とし、申し込みが超過した場合は抽選としたが、結果的には少人数のクラス編成となった。筆者と桑原講師がそれぞれ4クラス担当し、登録者数は8クラスで計156名であった。

学生の受講理由や動機は「読み書きが好き」「書くことが苦手なので克服したい」「実践・応用編ということなので、「文章表現Ⅰ」に加えて受講するよう第1クォーター科目の担当教員から勧められた」に大別できた。初回の授業の1時間目に資料読解をしたところ読解力のある学生が過半を占めており、授業態度、学習意欲も非常に良いので、第2回以降の授業は中から上位層向けに上方修正することにした。

c. 授業実践と学生の反応

「文章表現Ⅱ」の授業内容と図書館との連携は表1のとおりである。図書館内で授業を行う際には、告知ポスターを入り口、館内の階段、「業界リサーチルーム」手前とドア付近などに貼り出してもらうことができた。自習の学生や一般利用者からの苦情等はなかったとのことである。

表 1. 2015 年度前期「文章表現Ⅱ」における図書館との連携

週	授業内容	実施場所	図書館の協力
1	図書館と OPAC の使いかた	普通教室、 図書館	説明スライド（パワーポイント資料）、資料探索課題シート、図書館パンフレットの作成と提供、PC 画面の提示機器の準備
2	おすすめの参考図書を紹介する*	図書館	見本にする参考図書の選定と準備、使用した書籍の書架への配架の回数を増やして次のクラスの使用に備える
3	おすすめの新聞記事を紹介する*	図書館または 普通教室	切り取り可能な古新聞の提供、取り置き
4	おすすめの雑誌記事を紹介する*	図書館	使用した雑誌の書架への配架回数を増やし、次のクラスの使用に備える
5	データベースに親しむ	PC 実習室	アクセス制限の緩和を業者に依頼
6	意見文を新聞に投稿する	PC 実習室	
7	おすすめの一冊（書評作成）	PC 実習室	「書評コンテスト」応募要項等の事前確認
8	おすすめの一冊（POP 作成）	PC 実習室	書評 POP コンテスト企画への助言

*発表は翌週 1 コマ目を実施

まず初回授業の 2 コマ目を図書館ガイダンスに充て、図書館作成のスライド（パワーポイント）を用いて、図書館の利用方法や書架の並び方などを簡潔に説明した。資料探索課題のワークシートは代々の図書館職員が改良を重ねてきたものである。はじめに図書館を空間的に把握し、図書館の資料が分類記号に基づいて配架されていることを理解し、OPAC の検索方法を知るという順序で構成された、よく練られた課題である。これに、書架を見て回って気になった本の書誌情報と気になるフレーズを書きぬく課題を教員（筆者）が追加した。課題の説明とチェックは教員が行った。先述のとおり学生選書コーナーの本に興味を抱く学生が多く、このときにみつけた本を「おすすめの一冊」の書評に使う学生もいた。ガイダンスと学生の関心と授業課題がうまく結びついた例である。

第 2 週は参考図書を取りあげた。参考図書は信頼性の高い良質なデータが揃うので学生にはぜひとも存在を知ってほしい資料群である。山本（2007）は「学生自身がなにを探りたいのかわからないときに、それを探するために参考図書が活用できることを教えるのだ」「自分の分野の位置づけを知るためにも、次の研究をみつけだすためにも参考図書は有効だ」とその意義を強調する²⁶⁾。「文章表現Ⅱ」では 2 冊の参考図書を選び、そのうち 1 冊をクラス全体に向けて紹介することに

した。選んだ参考図書の現物と、その概要やおすすめ箇所を記入したワークシートを学生と一緒に見ながら確認し、最終的に発表する一冊は本人に選ばせた²⁷⁾。参考図書は学生にはなじみがないが、手に取って開いていると案外読みやすく面白いという感想が毎回必ず引き出せる。おすすめプログラムである²⁸⁾。

第3週、おすすめの新聞記事を紹介するプログラムでは、まずは図書館から廃棄処分前の古い新聞を譲ってもらい、新聞紙面の特徴や読み方を確認した。そして翌週までに各自で「おすすめの新聞記事」を選び、要約や問い立て、語句の意味などをワークシートに記入する。選んだ記事はコピーするか切り取って持参する。翌週にグループで各自の選んだ記事を紹介しあい、グループごとにオリジナルの壁新聞に再編集した。宿題を忘れた学生は図書館から提供された古新聞または図書館所蔵の新聞で同じ作業をした。このオリジナル壁新聞づくりはグループで作業して一つのものを作るのが楽しかったとたいへん好評であった。

図書館の収蔵雑誌には大学の特徴がよく現れる。第4週、雑誌記事の紹介は、所属する学部学科で学べること、自分が学びたいことを意識するきっかけをつくるのに効果的なプログラムである。幅広い情報に触れてもらうため、開架に並んでいる日本語雑誌(別コーナーにあるファッション誌などは対象外)を4グループに分けて、それぞれから1記事ずつ選ばせた。つまり必ず違う種類の4誌を手にとることになる。記事の選定と読み込み、ワークシート記入を宿題にして、授業では座談会形式で順に記事を紹介しあった。各グループに1人以上のファシリテーターがつくのが理想だが、人数が多いクラスでは不可能なので、4~5人のグループで記事紹介を行い、各グループのベスト記事をクラス全体に発表してもらった。当然ながら座談会が盛り上がったクラスほど、またやってみたい、面白かったとの声が多く聞かれた。宿題を忘れて時間内に記事を選んでワークシートを記入した学生は、座談会が盛り上がって楽しそうだったので宿題を忘れたのを後悔したとの感想を記していた。

第5週、データベースの実習からは別棟のパソコン実習室で行った。本学図書館が契約しているデータベースの特徴と使い方を説明し、新聞に意見文を投稿するための素材を探すことを課題とした²⁹⁾。これという記事が見つからなければ、それまでのおすすめの記事、雑誌記事を使ってもよいことにしたが、ほぼ全員がデータベースから見つけた記事で投稿文を書いた。学期の終わりに、受講生一名の投書が神戸新聞の意見投稿欄に掲載されたことを確認できた。

最後のプログラムは「おすすめの1冊」の書評とPOPの作成である。本学図書館が秋に開催している書評コンテストに全員応募することを授業開始時に予告し、1か月の間に本を選んで読みこんでおくことを課しておいた。書評はワードで作成し、メール提出とした。添削は授業時間外にしておき、時間内は全体講評と個別指導に充てた。ほとんどの学生が第4~5稿まで推敲を重ねた。個別に指導している間、待ち時間が生じる学生は、各自でおすすめ本のPOPを作った。手書きも味があって良いと勧めたが、一人を除く全員がパワーポイントを使って作成した。POPは授

業後、図書館で展示してもらうことを想定していたが、10月末の学園祭で初年次教育全体の取り組みを展示するという企画が持ち上がったので、来場者の投票によるPOPコンテストを開催することにした。それも刺激になったのか、POPはいずれも非常にレベルの高い、センスあふれるものに仕上がった。書評コンテストとPOPコンテストについては別稿で報告する予定である。

以上が本学での2015年度前期の取り組みである。学生の感想から図書館資料の活用に関するものを抜粋して紹介する（原文ママ）。

- ・ 参考図書は今まで進んで見ようとは思っていなかったので、今回は授業で見つけてじっくり読むことで参考図書や白書を読む機会があってよかったです。見つけた本はみんなに興味をもってもらえるように紹介したいです。
- ・ 他の人の紹介を聞いていて、こんな本もあるんだなと思ったりしたので、今後また参考図書を利用してみたいと思いました。
- ・ 今日は普段あまり目を向けない所に視点を向けました。普段あまり読まないジャンルだけあって、難しく感じましたが、図式化してあるなど資料が分かりやすく、興味を持って学ぶことができました。（参考図書の回）
- ・ 私が選んで読んだ資料のほかにも種類がたくさんありました。ジャンルや項目ごとに並べられていて、興味のない分野でも見つけやすいようになっていて、参考図書のおもしろさを知りました。
- ・ 雑誌にも様々な種類があり、いろんな情報を確認できたりして便利だなと思いました。
- ・ 雑誌にはやわらかいものからとても真面目なものまでたくさんあり驚きました。
- ・ 雑誌にもかなりの内容が詰まっているなど課題をしながら感じました。
- ・ 雑誌だけであっても今の政治の内容などいろんなことが知れるんだなと思いました。
- ・ データベース、とても便利だなと思いました。最新の情報もすぐ見れるし、紙のとは違って検索キーワードをすぐ変更して、すぐひらくことができ、これからも利用したいと思います。
- ・ データベースでは自分の興味のあることの情報がたくさんあったのでこれから活用していきたい。
- ・ データベースを使っていろんな記事を調べた。これをうまく使えばレポートが書きやすくなると思う。

Ⅲ. 今後の課題

一連の図書館を使った授業は学生からの反応も良く、成果物も予想以上の出来であった。成功の大きな要因は、授業の準備と実施にあたって図書館に柔軟な対応をしてもらえたことにある。

本学の図書館には専任の職員は現在一人しかいないが、レスポンスや判断が速く、スムーズに相談を進めることができた。その分、業務が一人に集中することになるので、今期は職員に授業内で講師役を務めてもらうことは控え、学生には参考図書の選定やスライド作成などで図書館の協力を得たこと、わからないことがあれば館員に聞くことを説明するにとどめた。しかし、もっとていねいに図書館における職員の専門性や役割を説明し、小さな疑問でも館員に質問するよう強調すべきであったと反省している。教員は常に図書館にいるわけではないし、いつでも図書館利用について指導したり学習支援に携わったりできるわけではない。林（2009）が言うように、調査するときには図書館の職員に尋ねることができるということを知っておくと、在学中だけでなく、卒業後でも公共図書館で調査研究ができるようになるからである³⁰⁾。今後は意識してそのような指導をしたい。

喫緊の課題は、図書館を活用する学習体験を新入生全員に再導入することである。2015年度前期に図書館を使った授業を受講したのは新入生900名弱のうちの160名である。大多数の新入生は図書館ガイダンスすら受けていない。結果、今年度前期の1年生の図書館利用は前年度同期の50%程度にとどまっている。まずは一度でも図書館に入る機会をつくって図書館の利用を促したい。

これに加えて検討すべきは、くりかえし図書館を使う機会の拡大である。学習習慣を身につけ、スキルを上げていくには同じ内容を少しずつ高度にしながら繰り返す「らせん（スパイラル）型」の指導を受けることが重要である³¹⁾。学生の学習経験やスキルの実情を把握し、学生が主体的な学習に取り組むことを後押しする学習の機会を今後も教職員で協働してつくっていききたい³²⁾。

引用文献、注

- ¹⁾ 文部科学省の用語解説によれば、ラーニング・コモンズとは「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する」と定義づけられている。科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会による「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」（2010年12月） 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm（2015年8月29日最終確認）
- ²⁾ 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年8月25日
- ³⁾ 注2の答申によれば、文部科学省の定義するアクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」。
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf（2015

年8月29日最終確認)

- 4) 橋本信子 (2015)「学習支援における教職協働 ―大阪商業大学楽習アワー年度前期の取り組み―」大阪商業大学論集 176号,47-48.
- 5) 岡田大輔 (2014) 「図書館の使い方だけでなく「なぜ」「いつ」図書館を使うか教える授業」『図書館雑誌』108 (1) ,18.
- 6) 同様の指摘は、茂出木理子「学習支援としての情報リテラシー教育：これまでとこれから」『大学図書館研究』第100号,53-54.
- 7) 社会科学系学部に所属する学生たち自身、「大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい」と思うか、「大学では特定の専門分野の知識や技能を見つけたほうがよい」と思うかという2つの対立する選択肢からどちらかを選ぶ質問では、前者が68.3%、後者が31.7%と回答している。ベネッセ教育研究開発センター (2013)『研究所報』vol.66 「大学生の学習・生活実態調査報告書」,95.
- 8) 毎日新聞東京本社『読書世論調査2014年版』,68-69.
- 9) 1ヵ月に読む本の冊数は、1冊が15%、2冊が14%、3冊が7%、4冊は5%、5冊が2%、6-8冊が各1%、9冊以上が3%であった。毎日新聞社 (2014) ,15-17.
- 10) 2013年5月の平均読冊数は、小学生が10.1冊、中学生が4.1冊、高校生が1.7冊である。1か月に1冊も本を読まなかった児童・生徒の割合は、小学生が5.3%、中学生が16.9%、高校生が45.5%と、明らかに学年が上がるにつれ、読書の習慣は低下していく。出典は注8に同じ。
- 11) 高校の図書館関係者からも、いまの高校生は授業や部活動、アルバイトなどで猛烈に忙しく、図書室は本来の役割である調査学習ではなく、読書のための貸し出しが中心になっていると報告がある。宮崎好久「学校司書の目から高校生の現状を見る」『大学の図書館』26 (2) ,24.
- 12) 高校の国語と社会の教科書には、調査して発表する方法を説明するページが入っているものもある。なかでも東京書籍『現代社会』（平成24年度検定済み教科書 2東書現社301）には課題の設定から調査研究の計画、活動、まとめ方、プレゼンテーション、討論に至るまでの説明が187-194ページにわたって詳しく記述されている。
- 13) 辻本 (2011)によれば「利用頻度の低い学生ほど、資料がない、探しにくいと感じて」いるという。辻本敏子 (2011)「図書館活性化をめざして 地域へのひろがり的魅力ある展示」『図書館雑誌』105 (10) ,705.
- 14) 三上彰 (2010)「授業「大学での学びと経験」と図書館との連携による図書館活用の試み」『Obirin today: 教育の現場から』10,21.
- 15) 同様の指摘は、林佐和子 (2009)「静岡文化芸術大学図書館・情報センターの学習支援の可能性を考える」『静岡文化芸術大学研究紀要』vol.10,25、渡邊貴子 (2013)「教員と職員の専門性をいかした協働の試み：教職科目における協働授業の実践」『静岡大学教育研究』9,55。渡邊は、教育活動をはじめとした図書館の学習支援、特にレポート指導は教職員協働が良いと結論づける。教員が求めるレポートと図書館員が想定するものが違ったり、分野によってレポートの形式が違ったりすることもあるからである。またレポートの採点や評価は教員が行うので、その科目の到達目標に合わせた図書館の活用ができるからであるとす。
- 16) 橋本信子 (2013)「能動的学習を促すための知的交流の場をつくる教育実践」『大阪商業大学論集』170号,106-107.
- 17) 米田菜穂・竹内比呂也 (2012)「戦略的ツールとしてのパスファインダー 千葉大学附属図書館における「授業資料ナビゲータ」の取り組みと展開」『図書館雑誌』106 (4) ,237.
- 18) 橋本信子 (2014)「アカデミック・スキル科目における主体性の引き出し方の工夫 「基礎演習Ⅱ」「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」における取り組み」『平成24-25年度大阪商業大学教育活動奨励助成費報告書』では、

図書館職員と複数の教員との協働で実施した授業について、学生の反応や教職員の所見を詳細に紹介している。

- 19) 大阪商業大学図書館は、蔵書数約 48 万冊（2004 年 3 月末時点）、学生数約 4500 人（2014 年 5 月 1 日時点）、専任職員数 7 名、年間開館日数 279 日。日本図書館協会編（2015）『日本の図書館 統計と名簿 2014』日本図書館協会。なお本項は「大学教育研究フォーラム」（2015 年 3 月 13 日於京都大学）における口頭発表「大学教育におけるコラボレーションの創出 -正課授業×学修支援センター×図書館-」を基に大幅に加筆修正した。
- 20) 橋本信子「学生の知的好奇心を引き出す授業実践 大阪商業大学における「おすすめ」を紹介するプログラム」大阪商業大学論集 174 号、および橋本（2004）（注 18 に同じ）を参照されたい。
- 21) 表彰式の様子は大阪商業大学図書館ホームページで公開されている。
<https://www.lib.daishodai.ac.jp/news/tp150203.html> （2015 年 11 月 5 日最終確認）
- 22) なお本稿で紹介した実践は、筆者が直接関わった授業と図書館との連携に限定している。大阪商業大学図書館はそのほかにも学生選書ツアー、学生選書コーナーの設置、読書会、図書館報の発行、図書館報に掲載された教員のおすすめ図書コーナーの設置その他さまざまな活動を展開している。
- 23) 本学は学生数 3200 名余、図書館の蔵書は約 20 万冊、年間開館日数 304 日。
- 24) 藤岡千伊奈（2015）「リメディアル学習者対象の授業内外多読の取り組み 2011 年～2013 年の多読実践報告」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』27（2）。
- 25) 2011 年度は年 4 回実施、参加のべ人数は 32 人、2012 年度は年 4 回、のべ 70 人、2013 年度は年 3 回、のべ 40 人、2014 年度は年 2 回でのべ 22 人であった。参加はその都度、希望者を募る。2015 年度前期は神戸市三宮のジュンク堂書店で開催された。
- 26) 山本千恵（2007）「図書館員が結ぶ学生と研究生生活と図書館 「情報探索入門」の演習を作る」『大学の図書館』26（9）, 147。
- 27) 発表にあたっては 400 字程度の発表原稿を用意するよう推奨した。原稿を書かずにワークシートをもとに発表しても減点にはしなかったが、やはり用意している学生は発表がスムーズであった。
- 28) 忽那（2008）も「参考「図書」類に直接接触する実習は、図書館に行かなくても情報は何でも集められると考えがちなネット社会に生きる学生にとって現在では逆に新鮮な体験となっているよう」だと報告している。忽那一代（2008）「京都大学図書館・情報リテラシー教育の現状 全学共通科目「情報探索入門」の 11 年」『図書館雑誌』102（11）, 778-779。
- 29) 多種の事典類を横断検索できるジャパンナレッジには、図書館を通じてアクセス制限を大幅に緩和していただいた。
- 30) 注 15 に同じ。
- 31) 野末俊比古（2008）「情報リテラシー教育と大学図書館」『図書館雑誌』102（11）。
- 32) 両大学図書館とのヒアリングでは、授業で図書館を使うと騒がしくなることを教員が懸念して躊躇しているのではないか、あるいはそもそも図書館で授業ができる（してよい）と思っていないのではないか、しかしほかの利用者から苦情などは出ていないので、ぜひ使ってほしい、授業と図書館が協働できるという意識を教員と共有したいという声を聞いている。

付記：本論文は、2015 年度流通科学大学特別研究費（研究課題名：「初年次教育における大学間連携の事例に関する研究および教育方法の共同開発と実践」）の助成を受けた研究成果の一部である。